

「そう」、学生が物思いにふけりながらつぶやいた。「かつてこの世には、ペリシテ人だのアマレク人が住み、戦争をするなどそれなりの役割を果たしていたのに、今じゃ跡形もなく消えてしまった。僕らだっておんなじですよ。今でこそ鉄道を敷いたり、こんなふう立ち話に哲学談義をしたりしているけど、かれこれ二千年もしたら、この盛り土も、重労働のあとで今は眠りこけている人々もみな、塵一つ残らないわけです。実際、空恐ろしいことですよ！」

「そういう考えは捨てないと……」。技師が真面目な口調で教え諭すように言った。

「どうしてですか？」

「どうしてって……そういうのは、人生を終える時に持つべき考えであって、そんなふうにして人生を始めるべきじゃないからですよ。そんな思想を持つには、あなたは若すぎます」。

「だから、どうしてですか？」、学生はくり返した。

「無常だとか虚無だとか、生の無意味、死の不可避、死後の闇とかいった考え——そんな高尚な考えはですね、私に言わせりゃ、君、どれも老境にあってこそ——長年にわたる精神の働きの結実として苦難の結果得られ、本当に知的な財産になってこそ、素晴らしくて自然な思想なんです。ようやく独り立ちし出したばかりの若い脳みそにとって、そんな考えは災厄でしかありません！災いですよ」。アナーニエフはこう繰り返して、片手をふった。「私の思うにです、君ぐらいの年頃に、そんなふうな考え方をするくらいなら、いっそ両肩の上に頭なんか載っけていない方がマシというものです。私はね、まじめに言ってるんですよ、男爵。もうだいぶ前から、一度このことを話し合いたいと思っていましたよ。というのはね、君と知り合った初日から、君がそういう呪われてしかるべき考えに強く惹かれているのに、私は気づいたんです」。

チェーホフ「ともしび」大平陽一訳（2021）

ロシア語での原文は以下を参照して下さい：

http://az.lib.ru/c/chehow_a_p/text_0070.shtml#04